

青少年問題協議会要点記録

日 時 平成27年6月22日（月）

午後3時から

場 所 市役所6階602会議室

議 題

- 1 平成27年度和光市青少年健全育成重点目標について
事務局から説明
- 2 平成26年度和光市青少年関係機関・団体の事業報告及び平成27年度事業計画(案)
について
関係各課より説明（産業支援課、こども福祉課、生涯学習課、スポーツ青少年課）
- 3 青少年健全育成標語募集要領(案)について
村山副会長説明
- 4 青少年健全育成作文募集要領(案)について
作文審査委員長 大久保委員説明
- 5 会議テーマ「望ましい人間関係のあり方と規範意識を育むために学校、家庭、地域は
何をすれば良いか？」について

大久保委員

近年の子供達の状況を考えたときに規範意識の低下、それは大きな課題になっているのは承知のことだと思われる。平成18年度教育基本法の改正、また学校教育法の改正の中で規範意識をいかに子供たちに醸成させていくかということが重要な課題になっている。学校においても集団行動が出来なかったり、学習規律が守られない、そういった生活指導上、生徒指導上の困難さもある。

我々が子どもの年代のころは、決して親が高学歴ではない。しかし、子供にしつけるべきことはしっかりとつけていたように思う。今の親は高学歴だけど、してはいけないことを、子どもたちに指導出来ているのかが課題なのかなと思う。

今日は、こういった課題について、それぞれの立場で意見を述べていただければと思う。

藤委員

小学生の子ども達に足りないものの一つに、子供達同士の遊び、これが決定的に不足している。我々が子どもの頃というのは、言葉が悪い表現になりますが、例えば「ガキ大将」そういった存在があって、子ども達が自立的な組織というものを自分達で編成して、自分達でルールを作ってその中で過ごすというやり方を十分に経験してきた。つまり自分達で決めたことは自分達で守るということは、子ども達にも徹底されてきた。

ところが今の子ども達というのはその遊びというものが減っている。家に帰ってから外でどれだけ子ども達同士で遊んでいるか、学校によって差はあると思うが、非常に少なくなっている。そうすると自分達でルールを守る守らない、良いか悪いのか判断できない。保護者世代の方々に関しても、自身がどれだけのことを経験しているのか価値をもって過ごしてきたのかというのかなり大きいのかなと思います。

石川委員

最近の中学生は素直すぎるのではないかというくらい約束を守ります。それは教え込まれた約束をしっかりと守るというような傾向が出てきている。しかしそこに自分の判断があるかという、疑問に思います。

もう一点、望ましい人間関係で横の関係は比較的に作りやすいということはあるが、縦の関係が今非常に作りづらくなっている。限られた人間関係の中で育ってきている傾向を感じる。以前は、色々な大人との接点があったり、もっと小さい子との接点があった。そういう時間、又は場所的なものが不足してきているのではないかと感じる。

会長（市長）

今、御二方からご発言いただき、素直に教え込まれたことは守るけど、自分の判断は出来ないということ、そういう意味ではそういうところも対応とか経験を積ませるというのは、一つの重要素なんだと感じた。

先ほどの石川委員の話の中で、大人との接点、和光の場合は昼間大人がごそっといなくなっている状況で、住職近接の重要性を感じさせられる。

山崎委員（生活安全課長代理出席）

非行少年、少年問題の統計的なものとして平成14年から平成16年の埼玉県刑法犯認知件数は約18万件であった。現在8万件をきって7万6千件になっているが、その中で犯罪を行ったものを逮捕若しくは検挙した数は変わらず、1万5千件である。その中で平成14年の少年犯罪の比率は50%で2人に一人は子どもであった。平成26年は21%まで減少し、五人に一人が子どもであった。青少年的にはすごく素直な子供が出来ていると統計的にも見ると考えられる。しかし、昔と大きく変わっているところは触法少年の凶悪化、低年齢化である。少年法で処罰できる年齢以下の犯罪が増えている。

地域ぐるみで低年齢化した家庭の見守り活動が一番いいのかなと、日中、高齢者と子供しかいない地域だとしても、高齢者が声かけすることで大人とのつながりが出てくる。どんなところでも声かけ運動が行われれば、特に小さい子ども達は規範意識というよりもコミュニケーションが不足しているとするなら、コミュニケーションが犯罪を少なくする。色々な社会生活を上げる意味では一番いい方法なのではないかと思う。

会長（市長）

実際に犯罪の件数としては減っていて、更に少年犯罪が減っているけれども、コミュニケーション不足とか、家庭の問題といった中で少年の抱える課題、指導を考えていかなければいけないのかなと受け止めました。

鳥飼委員

家庭環境が影響しているのだろうと思う。核家族が進んできて、近所の人との関わりが少なくなり、子どもに対して叱る大人がいなくなっている。今はゲーム機がいっぱいあって、昔は森があって緑があってその中で子ども同士がかけまわっていた。また、家庭環境によって、子どもの中で格差がある。昔は8時に寝なさいと言っていたのが、習い事によって寝る時間が夜遅くなって子どもの生活リズムが変わってきているのも規範に影響しているのかと思う。教育現場では昔は先生は絶対的で怖いというのがあった。今の子どもは先生に対してどう思っているのか疑問に感じる。学校の先生が生徒を怒ることによって、保護者からクレームがきたり、今は変わってきている気がする。

会長（市長）

家庭環境の変化、子どもの遊びの関係の変化、また、格差の問題、そういったところが影響があるのではないかという発言でした。

山崎委員

児童相談所等の扱う事例によると、虐待によって深く傷ついた子どもの心を回復させるための支援プロセスが対応策としてあるが、現場の実態は大変困難な状況であるといわれている。親子再統合に向けた支援を行う際、親自身が幼い時に虐待を受けて大人となり、躰と称して自分の子どもを虐待してしまうという負の連鎖を断ち切れない弱さを持っている。これは統計的にも高い数値であるといわれている。また、虐待が発生した家庭の多くは経済的に問題を抱えており、親自身が貧困から抜け出せず次の世代に引き継がれてしまうという貧困の連鎖が、潜在的な課題の一つとなっている。ひとり親家庭など子育てへの経済的負担を軽減する低所得者層への支援制度は、社会状況からみて重要な施策の一つではないか。一方、地域のなかで家庭の課題を背負った子ども（子どもの貧困）を見出すことは、難しい状況である。地域でより良い環境をつくる場合、行政と保育園・学校が地域支援者

(民生児童委員等)を含めた情報共有の連携ネットワークを形成し、支援に取り組んでいくことが今後も必要であろう。

会長（市長）

まさに、地域、行政、福祉と教育の連携というところが問われていくところですね。

待鳥委員

和光市地域子ども防犯ネットという組織で、この15年位小中学校の保護者の方たちと一緒に活動している。数年前から規範意識がない行動が身の危険を招くと感じることがある。狭い道の歩き方やインターネットの使いなど、実際の事故に巻き込まれることもあるので、そういう話をよく保護者の方とする「親が言ってもきかないので、学校で注意をして欲しい」とか、親向けの研修をする際に、「私たちが知っても仕方ないので、子ども達に直接教えて欲しい」とか、そういった意見がかなり頻繁にある。

家庭で子どもに、今まで自分が生きてきた実感の中で、しっかり伝えるべきことを自信をもって伝える姿勢が必要。親自身が自信が持てないことと、子育ての環境が結構タイトになっているというか、あれもあり、これもありという多様性がなくなって、いわゆるスタンダードについていけないと後ろ指を指されるという不安が強いのではないかな。

会長（市長）

確かに学校で指導してくれとかそういう話は良く伺います。親として子どもを育てていても、何が正解になるかというところで、マスコミとかネットの影響を受けてしまうというの方が多いのかなと感じます。

村山委員

スポーツをしている子ども達は指導者に対しては絶対服従。何も言わなくても挨拶もする。ところがそこを離れたときにできなくなる。結局何のために挨拶をするのか自分で納得していないことが大きな原因であるのではないかな。

基本は自分で考えて何でありがとうと言うのか、或いはお願いします。と言うのかきちんと踏まえた中で、スポーツを通してながらルールを守り、きちんと挨拶を出来るような機会を設けていきたい、地域として頑張っていきたいと考えている。

会長（市長）

まさにコミュニケーションの第一歩が挨拶。しかも、単にやるだけでなく、納得性や自分達で考えて挨拶をしっかりするというのが重要であると思いました。

畠山委員

家庭でも挨拶を普通はしなければいけない。親子関係が希薄になっていて、親が共働きが多いという事もあって、子どもに触れる機会も減っている。幼稚園までは手を引くが、小学校から自分で動くようになり、自分で判断して言うこと聞かなくなると手を離す。お母さんも最初からお母さんではなく、子育てしながらお母さんになる。子どもに対して悩みを抱えている親のコミュニティのとれる事業や場所もあってもいいのではないかなと思う。いつでも行けて何でもない話をしながら、知らない人や友達、シニアの方がいてくれる場でマニュアル通りの子育てでない、幅広い子育てを教わるができる。子どもが中高生になれば思春期がきて専門外の悩めることも話せる場があってもいいのではないかな。

会長（市長）

親も苦労があって親の育ちを支援するのも一助になるのではないかと思います。

森田委員

規範意識について親が一生懸命で、子どもにがみがみ言って、子どもは素直によく聞いて表面上はとてもよくやっている。しかしネットでは家庭の中でも匿名性がまかり通って、親は何やっているか見えない、見ようと思っても見えるところにいない。今まで大人が保護して監督して、子どもが見えないようにしていた情報だって子どもが自分で見にいける。家庭の親にだってよく分からない状況がある中で、子どもが学んでいるのは表と裏を使い分けてもいい、世の中全体がそういうところがあって、問題行動が起きると、家庭も勉強会に行ってみるけど、よく分からない、どうしたらいいかわからない状況があるようである。

未就学のコミュニティの場が和光市は手厚い。学校に行ってしまうといきなり子どもの様子が見えなくなるし、保育園の先生のように生活の面倒まで細かく見てもらえる環境ではなくなる。色んな悩みを家庭に持ち帰っても、親が何をどうしたらいいかわからない、誰に聞いたらいいかわからない状況になる。それを受けいられる地域にしていく事業、取り組みが、家族ごとを受け入れられるような何かがあることで親と子どもの関係がもう少し良くなれば、この誰かが困るから守らなきゃ、誰かが気持ちを想像する力があれば、きつときちんと守ろうと思う。何のためにが見えないから、そういうことがきちんと説明できるように、親と先輩、地域の力が必要になる。

会長（市長）

家族としての不安さを沢山の家庭が持っている。何しろ38,500世帯で8万人ですので、基本が核家族ということになる。何とか繋げる場があればいいというご意見でした。現状に関するご意見をいただいた中で、いくつか見えてきたものがあると思います。例えば学校の現場から、子ども同士の縦のつながりがルールになってくる気がするが、な

なかなか自然発生的に出来る状態ではない。以前は子ども同士の集団の中では自分達で判断することも多々あったわけですが、現在は判断能力を養う場がなかなかない。そういう環境をいかに作っていくかということが課題である。

親世代の方は昼間はあまりいない。大人との接点、親以外の接点というところも重要ではないかと思う。「子どもカフェ」は、違う家の親子が普通に会話したり関わったりする場であって、自分の子どもと同世代の子どもがいることによって、こちらもわかるものもあるし、子ども達も大人ってこういうものだと思えてくるものもあるような気がしました。

子どもの中のつながり、親のつながり、昔の近所の叱ってくれる大人の話がありましたが、よその大人とのつながりを仕掛けていけないかと思います。

挨拶は仕掛けていればいくらでもやっていける気がします。小学校・中学校・保育園で挨拶運動をやっていますが、知らない方が通りかかって保護者がその人に挨拶の声をかけてもその人はそのまま知らん顔で通り過ぎてしまう。そういうこともあるので、挨拶運動をやっている期間、いつからいつまでと原始的な運動にして、その期間には挨拶を絶対にするというようにしてもいいのかなと村山委員の話を伺いながら思いました。

この話し合いだけで大きく規範意識を育てるにはならないが、いくつかヒントがあったようにと思いますので、それを踏まえてそれぞれの現場での取り組みをしていただきたいと、役所としても今日の話をまとめる中で次のしかけを考えて行きたい思いました。先ほど子どもの貧困の話がありましたが、これも教育委員会と福祉部門が連携して対策について考えているところです。

山崎委員

地域の活動について、小中学校対象の自治会・育成会活動は活発であり、多くの保護者が子どもに関わりのある地域活動を手伝っている。ところが自分の子どもが成長すると、その活動から離れてしまう傾向にある。子どもを通して得られた地域の文化や人々とのつながりは地域の人的財産であり、我が子だけでなく他の子どもにも関わることで、子育てを客観的に捉えた経験者となる。また、郷土を愛する人々（高齢者等）と共に地域の活動を創り上げていくことは、地域の活性化にもつながるのではないだろうか。

会長（市長）

確かに、育成会にしても地域の活動にしても子どもが卒業すると親も卒業してしまうというのがあるなかで、せっかくのつながりをいかにつなぎとめていくか。

資料の一番最後に教育大綱というものを付けさせていただいています。教育大綱というのは、今回の教育基本法、地方教育行政の組織及び運営に関する法律、色々変わっていく中で、基本的な方向性を教育委員と話し合いながら作ることになっていて、それに基づいて策定したものです。

基本理念としては生涯にまたぐ自発的に学ぶという中で、健やかな人生の実現を支援する

教育、一緒に学ぶ教育というのが関わっていきます。

そこから基本方針として、一つ目は教育や体力をつける。二つ目は社会教育を一生応援します。三つ目に福祉、地域との教育との連携を作っていく中で地域教育をしっかりとやっていくということを策定しました。先ほどのコミュニティの話や学校と福祉との連携の話も盛り込んでおります。これを踏まえて、今日のテーマにもあったような様々な課題に取り組んでほしいということで教育大綱を紹介をさせていただきました。

近藤委員

少しでも外に出た時や下校時の子どもに挨拶すると必ず返事が返ってくる。以前、中学生はあまり挨拶がなかったが、今は挨拶すると男女関係なく、ほとんど挨拶してくる。先ほどの村山委員の発言のとおり挨拶は凄く大切だと思う。

会長（市長）

挨拶運動で何度も何度も挨拶したことが、子ども達が成長して顔がわからなくなっても挨拶することで顔を思い出したり、コミュニケーションは大事ですね。

稲垣委員

市長が言ったように、昼間は年寄り子どもだけ。昔は家に帰れば、親がいて、おばあちゃんもいて、学校の役員も昔は専業主婦が多かった。今は働きに出ている人が多く、物は沢山あるけど、親子の会話が少なくなっている気がする。

会長（市長）

昔は地域の大人がいて家に帰れば「ただいま」「おかえり」というのがあったが、その時代を実現することは出来ないかもしれないけど、そのヒントは沢山あるんだと思いました。

牧委員

小学生の親として、小さい時から子どもの子育てがかわいい、かわいいで、かわいいをはき違えているような気がする。例えば、曲がり角を飛び出す、飛び出すのがいけないよ、なぜいけないのか、いけないのは何故かというところを伝えてこなかったのが今の現状ではないかと思う。親への教育というところが大きな課題ではないか。

会長（市長）

親世代として、重く感じました。

この話し合いだけで大きく規範意識を育てるにはならないが、いくつかヒントがあったように思いますので、それを踏まえてそれぞれの現場での取り組みをしていただきたいと、役所としても今日の話をまとめる中で次のしかけを考えて行きたいと思いました。

【出席者】

市長、副市長、待鳥、鳥飼、大久保、上篠、森田、山崎（石井委員代理）、木田、石田、藤、石川、牧、近藤、稲垣、鈴木、村山、池田、富澤(甚)、小林、田中(朋)、畠山、井上、山崎

深野産業支援課長、新坂こども福祉課長、富岡生涯学習課長
事務局 スポーツ青少年課(亀井課長、鈴木課長補佐、村田)